

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学 文学部2回 水無瀬 美歩

今回、文学研究科のハイデルベルク大学との共同学位の紹介をうけて、文学部生として、ドイツ・ハイデルベルク大学とフランス・ストラスブール大学へ派遣させて頂いた。両大学の学生とのディスカッションや、ハイデルベルク大学の京都大学オフィス見学、市内見学など、大変有意義な機会に恵まれた、素晴らしい1週間だった。そのなかでも私は、ストラスブール大学との発表・ディスカッションについて詳しく報告したい。

今回の派遣にあたっての、共同テーマは、「グローバル化のなかのナショナリズム」であった。グローバル化がすすむなかで、移民排斥運動や右傾化が高まるなど、各国でナショナリズムが高まっているのは明らかである。2016年は、イギリスのEU離脱化やアメリカのトランプ大統領就任など、衝撃的なニュースも多く、今こそグローバル化とナショナリズムの葛藤について改めて考える機会が必要だったと思う。

ストラスブール大学とのワークショップは、参加者は日本語学科の修士課程・博士課程の学生だった。彼らは日頃は大学では仏日翻訳の授業が多いらしく、各自日本に関する独自のテーマで論文作成を進めているという。日本留学経験者・内定者もおおく、流暢な日本語でプレゼン発表してくれた。ストラスブール学生は、「日本のソフトパワー世界にみられるミリタリズムの台頭」「自民党の憲法改正草案(第9条)」「ヨーロッパから見る日本のヘイトスピーチ」というテーマでそれぞれ発表した。私たち京都大学からは、「身近な視点からのナショナリズムとレイシズム～在日問題～」 「ヘイトスピーチについて」「食文化をとおしてみるグローバル化とナショナリズム」というテーマで発表させていただいた。

まず驚いたのが、ストラスブール学生の、日本の憲法改正、右傾化・保守化、ヘイトスピーチへの問題意識の高さである。日本のゲームやアニメなどへの関心も高いことから、「ミリオタ」現象への危機感を抱いている学生もいた。海外でも人気のある「艦これ」といったゲームなどは、市民に戦争についての偽りのイメージを植え付け、戦争は楽しいと思わせてしまう効果があるといえる。それによって、軍事・サバイバルゲームなどに楽しみを見出す「ミリタリーオタク」が増えており、日本の現状のソフトパワー・クールジャパン政策は、このような危険な一面を併せ持っているのではないかという指摘が印象的であった。私自身も以前から、そのような立場にたっていたが、日本国内にいる限り、日本の作品に対して強く非難するのは難しい。それらの本当の目的は平和を唱えることであって、戦争を題材に、戦争の非道さを伝える一手段なのだという意見の鵜呑みになってしまいがちだ。しかし改めて、海外には日本の作品・政策のひとつひとつが、日本を表わす重要資料として伝わるのだということ意識しなければならないとおもった。

もうひとつ印象的だったのは、日本のヘイトスピーチについて紹介したストラスブール学生が述べた、「憎悪のピラミッド」だ。憎悪の段階が5つにわかれ、ピラミッド型の下段から、偏見→偏見による行動→差別→暴力行為→殺戮・民族浄化となる。このピラミッドを、フランスの学生が、日本で在日朝鮮人などへのヘイトスピーチについて発表するという空間で知ったのはとても胸に刺さるものがあった。私自身、日本で在日朝鮮人への偏見、在日特権、在特会、新大久保などでのヘイトスピーチについて今回発表させていただいたが、在特会などの過激な行為は、一部の極端な形態だという認識があったようにおもう。しかし、このピラミッドの図を見た瞬間、日本人のなかに多かれ少なかれ潜んでいる彼らへの偏見は、それを口に出すか出さないか、過激な行動に出るか出ないかは関係なしに、すでに潜在的に「憎悪」の段階に属しているのだと言うことを直感的に感じさせられた。本人の自覚があろうとなかろうと、「偏見」から「偏見による行動」に、「偏見による行動」から「差別」になるにつれて着実にピラミッドの段は上がるのであり、次には「暴力行為」、そして「殺戮・民族浄化」が控えている。私たちが何気なく見過ごしている、在日朝鮮人への偏見や差別の感情は、実は「民族浄化」につながる恐れのあるほどの、明らかな「憎悪」の感情なのだということにぞっとさせられた。事前に在日朝鮮人について調べている中では、それほどわからなかった、このぞっとした感覚は、遠いフランスで、フランスの学生に指摘されるという空間でこそ気づけたことなのかもしれない。また、在日「特権」は、彼らが障害を抱えながらも、日本で少しでも住みやすくするための手続きの手順なのに、なぜ日本では「特別な権利」として非難されるのかという、在日朝鮮人文学を研究しているフランスの学生からの質問は、帰国後も私の胸に残っている。

グローバル化のなかで、多様化・均一化がすすむことで、アイデンティティに関わる自国の特徴が喚起されて、ナショナリズムが強化されるという現象は当然かもしれない。しかし、恐れるべきナショナリズムや排外主義は、他者に対する知識の乏しさや、他者を人間だとみないことからの偏見・差別からくるものとおもいます。ストラスブール大の先生が最後におっしゃった、「外国人を嫌う人は、自分が「外国人」になったことがない人です。日本の学生が忙しいのは充分わかっていますが、一生に一回でも、あなた方が外国人になってください。」というお言葉を、ずっと大切に心に留めていきたいと強く思う。